

中京大学国際教養学部 経験交流会

主催：中京大学国際教養学部教育事業推進委員会

後援：中京大学教育推進センター

大学における教育と研究の接点 —語学教育を中心に—

開催日時：2016年11月2日（水）16:40～18:10

開催場所：中京大学ヤマテホール（名古屋キャンパス0号館2階）

パネリスト：① 平郡秀信 氏

「言語理論の英語教育へのフィードバック」

② 吉川次郎 氏

「思い込みとこだわり—中国学習をとり巻く環境について」

③ アルファロ・フランシスコ 氏

「選択言語とスペイン語教室」

④ イミック・アレクサンダー 氏

「海外でのアクティブラーニング」

※いずれも中京大学国際教養学部教員

司 会：手塚崇聡 氏

司会（手塚）：

本日は、国際教養学部の教員と学生さんに向けての経験交流会を開催させていただきたいと思います。司会の国際教養学部の手塚と申します。どうぞよろしく願いいたします。早速ですが、お忙しい中、学長にお越しいただきましたので、まずはご挨拶をいただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

学長（安村）：

こんにちは。学長の安村でございます。今年も経験交流会が開かれるということで、たいへん幸いに思います。振り返ってみますと、この経験交流会はまだ国際教養学部が教養部の時代に、大学教育の中で教養教育をどのようにより豊かなものにしようかということを検討する将来計画委員会がありました。その中で、カリキュラムの改善を考えるカリキュラム改革部会とともに、実際の授業をどういうふう改善していくかについても考えようと教育部会ができました。その活動の一環として、先生方にそれぞれの授業の工夫点を含

めた苦労話や経験を話していただいて、学び合おうではないかということでこの経験交流会が始まりました。現在では、FD活動というものがごく当たり前に行われていますけれども、まだそれほどはっきりしていなかったころから、教養部はこの催しを全学に開放し、ほかの学部の先生方や学生さんにも来ていただき、意見交換しながら授業改善に取り組むことを始めました。他大学の先生にも話していただくことも含めてもう25～26年やってきたということです。そういう意味におきまして、これが続けられていることは大変幸いなことだと思ふ次第です。

今回は、「大学における教育と研究の接点」という大きなテーマであります。大学は、教育機関として学生たちへの教育をするわけですが、高等学校とは違って、教員は研究活動をし、その研究に根差して教育をするというのが存在理由であろうと思っております。よく、G型大学（グローバル型）とかL型大学（ローカル型）といういわれ方がなされますが、我々はG型大学、すなわち、しっかりとした研究をし、教育する大学を目指したいと願っています。関連してもうひとつと申しますと、専門教育とともに教養教育を大事にするということを、一時教養不要論が全国的に広まる中でも、本学の特色にしてきました。その点について知っておいていただきたい経緯があります。25年前の1991年に大学の設置基準が大綱化され、それまでの教養教育と専門教育の垣根がはらわれて、両教育の単位とかやり方はそれぞれの大学で決めてよいという形が国のレベルで決まりました。それまでの中京大学の教育体系での教養教育は、1、2学年で56単位でした。その中で語学教育は英語と第二外国語がそれぞれ8単位、計16単位でした。英語は1年生、2年生で必ず週2時間やり、第二外国語をもう一つ、1年生、2年生で8単位とるということになっていました。しかも、第二外国語としてはほかの大学よりも多様でした。普通は、ドイツ語、フランス語くらいのところが多かったのですが、本学は、それらに加えて、中国語、ロシア語も選択の中に入っていました。そういう意味で、中京大学は語学教育にはそれなりに力を入れていたと言えます。そして人文・社会・自然科学の科目群からそれぞれ3科目12単位選択（計36単位）、保健体育科目4単位と合わせて56単位でした。大綱化の波で教養と専門の単位区分について、教養部と学部とで個別に交渉することとなり、中京大学型の体系が出来上がったものでした。その頃教養部長を務めていましたから大変でした。語学に戻りますが、当時としては多彩な外国語教育がなされていたことを背景にして、ドイツ語・フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語のいずれかをメインとし、英語も学ぶ国際教養学部が誕生したのでした。もちろん教養を大事にしてグローバル人材を育てるというコンセプトの学部となったのでした。

今日は、英語、中国語、スペイン語、ドイツ語の先生方から「大学における教育と研究の接点」というテーマでお話しいたします。実際に語学教育をしながら研究もされているわけで、そうした研究にどうつなぎ合わせて、より魅力ある語学教育がなされるかというお話かと思っておりますので、おおいに経験を交流し合っていたいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

司会：

どうもありがとうございました。今、お話がありましたように、今回の経験交流会のテーマは、「大学における教育と研究の接点」ということで、特に語学教育を中心に、先生方のご経験をここで交流させていただければと思っております。これからちょうど1時間程度を予定しておりますが、各先生方、15分程度でご報告をしていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。順番は平郡先生からでよろしいでしょうか。それでは、平郡先生、どうぞよろしくお願いいたします。

平郡：

こんにちは。僕は国際教養学部の教員の平郡と言います。僕は、豊田で英語を2コマ、八事で4コマ英語を教えているので、どういう英語教育を実施しているか、その実践報告を皆様にお知らせします。

先ず、豊田から説明します。豊田の場合には、スポーツ科学部と工学部の学生が同じクラスで授業を受けています。スポーツ科学部の学生は電子辞書を持っているんですが、その電子辞書の使い方に習熟していない。電子辞書（EX-word）を引くと、各単語の左上には星印三つ、星印二つ、星印一つ、無印とラヴェル分けがされている。星印3個は中学生、星印2個は高校生、星印1個は大学・社会人が必携の単語であると区別されている。豊田学舎の学生には「授業を受けるに当たっては、先ず予習し、テキストの中の難しい単語は必ず、EX-word を引いて調べておいて下さい」と言っています。残念なことに、豊田学舎の学生はBランクの単語が頭に入っていないから、そういう学生に対しては「授業中は一生懸命EX-word を引いて下さいよ」「分からない単語があれば、授業中となりの人と喋るんじゃなくて辞書を引いて下さいよ」と喚起しています。ましてや「教室の後の方でスマホをいじるのは論外ですよ」とこういうところから授業を始めています。

次に、英音と米音で発音が違う場合には、EX-word では、前半が米音、後半が英音表記になっていると説明しています。スポーツ科学部の学生はEX-word を持っていると言っても、ここまでEX-word の使い方に慣れていませんから、僕はスポーツ科学部で教える場合には、初歩的などころからスタートしております。

今度は八事地区の教育実践に移ります。八事学舎の場合には少し難しいことを授業中に言っております。今、僕が持っているこのパンフレットはEX-word の中で発音注意というラヴェルのあるものをAからZまで僕がピックアップしたものです。こちらの方はEX-word の中でアクセント注意というラヴェルのあるものをファイルにしたものです。EX-word の中には、発音注意、アクセント注意という表示はあるんですが、何故かの理由は明記していません。その何故というのを僕がプラスアルファで生徒に説明しています。

少し具体例を挙げます。残念なことに国際教養学部の学生はdawnを[daun]と発音してしまいます。以降同じようにawardを[əwɑ:d], dauntを[daunt], exhaustを[ɪgzɔ:st]と発

音してしまいます。そこで僕は ME/au/ を持つ語は現在英語では [au]>[ɔu]>[ɔ:] になっているんですよと授業中に徹底的に教え込んでいます。大統領就任演説という inauguration も [ɪnɔ:ɡjʊreɪʃən] と正しく発音が出来ようになる。aeronautical も、ME/au/=[ɔ:] になっているのだから、[ɛərɔ:nɔ:tɪkəl] と正しく発音が出来ようになる。

少し難しくなりますが、現在英語で girl は [gɜ:l], term は [tɜ:m], church は [tʃɜ:ʃ] と発音されている。<ir>, <er>, <ur> は [ɜ:] になるんですよと中学生の時、英語の先生に教わりました。何故、元違う <ir>, <er>, <ur> が [ɜ:] になるかの理由は教わらなかった。その理由は [r] という子音はその前の母音に影響を与える子音だということです。[r] という子音にはその前の母音を低音化し、更に中舌化する特性があるということです。<ir> は元来 [ir] であったが、[r] のため低音化され [er] となり、更に [r] のため中舌化され [ɜ:] となったものである。<er> は元来 [er] であったものが、[r] の中舌化作用のため、[ɜ:] となったものである。<ur> も元来 [ur] であったものが、[r] の中舌化作用のため、[ɜ:] となったものである。

殆どの国際教養学部の子生は worry を [wɜ:rɪ] ではなく間違っって [wɔ:rɪ] と発音してしまう。これにも理由がある。worry も元来 ME/u/ であったものが、フランス語の書記体系が導入され、ME/u/ が <o> で書き表された結果であり、church と同じ音変化を辿ったものである。

それからもう一つ earth, heard, learn, pearl, search も現在英語では [ɜ:] と発音されている。これらにも理由がある。[r]+子音字は二重子音になり、二重子音はその前の母音を短音化させるという特性がある。earth の場合、[r]+[θ] は二重子音となり、その前の母音 <a> が削除され ME/e/r(=term) と同じ発達過程を辿り、[ɜ:] となったものである。元来違う綴字を持つ <ir>, <er>, <ur>, <wor>, <ear> が現代英語では [ɜ:] と同じ発音を持っている。こういう発達過程を convergent development という。それに反し、divergent development という発達過程もある。divergent というのは元、同じ発音であったものが、音声環境によって発音が変わることを意味する。man は ME の [man]>PE[mæn] と発音される。基本母音の [a] が [æ] に変化したことになる。次に car は [kɑ:] と発音される。昔は car は [kar] と発音されていたが、[r] という子音はその前の母音を長くする特性があるので [kɑ:r] となり、その後、[r] が消失し、[kɑ:] となったものである。last は [lɑ:st] と発音されている。[f, s, θ] という子音もその前の母音を長くする特性を持っているからである。want は [wɔnt] と発音される。[w] の後で <a> が来るので、<a> が [w] に引きずられ、舌の位置が [a] から [ɔ] に移り、<wa> は [wɔ] となった。war は [wɔ:] と発音されるが、[w] が [a] を [ɔ] に変え、[r] がその前の母音を長音化させ、[wɔ:] となったことに由来する。ME/a/ を持つ語はその音声環境に従って正しい発音が付与されることになる。しかし、言語ですから、ME/a/ を持ちながら、father(=[fɑ:ðə]), water(=[wɔ:tə]), Thames(=[temz]) とルールに反する、流れに棹さず単語が出てくる。これが言語だということです。いくら定式化してもその定式化に合わないような単語が出てくる。今日の僕の関心はここにあります。英語の発音を考える場合、発音は単語を前から見るよりも、後ろから見る方が定式化しやすいということです。ある単語が _____VCe という音声環境で終わっている場合 (V は母音、C は子音、e は語

尾を表す)、この記号列は語尾 <e> がその前の母音の発音がアルファベットの発音になっていることを表している。具体的に説明します。man, human, van は _____VCe を満たしていないので [æ] と発音されるが、mane, humane, vane は _____VCe を満たしているので <a> のアルファベットの発音で [eɪ] という正しい発音が自動的に付与されることになる。vane は“風見”という難しい単語ではあるが、_____VCe の意味合いを知っておれば、正しい発音が出来ることにつながる。bit, quit, sit は [ɪ] と発音されるが、bite, quite, site となれば _____VCe を満たしているので <i> のアルファベットの発音である [aɪ] という正しい発音が自動的に付与されることになる。同じように、con, dot, not は [ɔ] と発音されるが、cone, dote, note となれば _____VCe を満たしているので <o> のアルファベットの発音である [ou] という正しい発音が自動的に付与されることになる。_____VCe の持っている記号の意味を学生に教えることは今までに見たことのない単語を正しく発音できるようにすることを意味する。

次にアクセントの方に移ります。famous は [feɪməs] と発音しますが、infamous は [ɪnfeɪməs] ではなくて、[ɪnfəməs] と発音します。強勢が発音に影響を与えた例です。finite は [faɪnaɪt] と発音しますが、infinite は [ɪnfəɪnaɪt] ではなくて [ɪnfənət] となります。これも同じ規則が適応された結果です。sew の発音を知っている学生は少ないと思います。sew は [sou] と発音するんです。dew, few, new から類推すれば [(j)u:] だとも思いますがそうではありません。ME では séow, seów の二つの異形が並存しており、前者から綴字が、後者から発音が由来したものです。綴字と発音が別々の方言から標準音になったものです。長い歴史の中にはこういう風変わりなものも見出される。

それから go, shine の三基本形は go, went, gone; shine, shone, shone です。gone, shone の発音は、音声環境 _____VC を満たしているから、現代英語では [ou] とならなければおかしい。しかし、これは開音節短化という現象であり、音変化の例外であるということになります。

最後にもう一つ言わせて下さい。これは僕が口を酸っぱくして言っている単語です。front は [frɒnt] ではなく、[frʌnt] です。oven は [ouvn] でなくて、[ʌvn] です。onion は [ɔnjən] でなくて、[ʌnjən] です。これも理由があります。これらは ME/u/ を持っていた語で、<o> はフランス人写字生によって導入されたものであり、1250年頃から、minim(m,n,u,v,w) に隣接している ME/u/ を表すのに用いられたものである。<u> の代わりに <o> を用いる習慣は <u> に音変化が起こったことを表すのではなく、写本を判読し易くする手段の一つであった。

時間がありませんので、この辺で結論を申しますが、先ず、英語という言葉は今までは違った視点で見つめ直して下さい。そうすると、英語の新しい局面が見えてきます。それと同じように、この社会の中にはいろんな現象が生じていますが、その現象を高校生とは違った視点で見つめ直して下さい。そうすると、違った局面が見えてきます。今日の私の発表はこれで終わります。ご静聴どうも有り難うございました。なかなか話が込み入っ

ていたので難しかったと思いますが、質問があれば、司会者のもと、質問を受けることにします。どうも有り難うございました。

司会：

平郡先生どうもありがとうございました。続いて、吉川先生、このまま引き継いでよろしくお願い致します。

吉川：

私、PowerPoint もレジュメも何も用意していませんで、すみません、座ったままで失礼いたします。吉川次郎です。国際教養学部で中国語を担当してまして、学部以外にも、法学部とか豊田のスポーツ科学部、そして、工学部でも中国語を教えています。今日の全体のテーマは、「大学における教育と研究の接点」ということですが、私は近代中国の思想文化というのを研究しています。その中で、日本と中国の関わり合いとか、特に、お互いがお互いをどういうふうに見ているのかということにも関心を持っています。今日の私の話というのは、大半が教育実践に関わることですので、本来のこの会の趣旨からは、つまり、研究を教育に生かすということだと思うんですが、かなりズレてしまうと思う。今の平郡先生のお話から見ても、また、ほかの先生方のレジュメを拝見しても、「ちょっと、私、ここに座っていていいのかな」というのが、今、正直な感想なんですけど、ちょっとズレてしまうと思います。ただし、私の話の背景には日本と中国の関係、あるいは、相互認識というのがあるという点は述べておきたいと思います。

今日の私のタイトルなんですけれども、「思い込みとこだわり」ということにしました。最初に結論を申し上げておきますと、中国語の学習においては、「思い込みは少なく、こだわりは多くあるべき」という単純なものです。これはほかの言語についてもきっと同じことが言えるのかもしれませんが、中国語においてはなお一層そうだと、私、個人的に思っているためにそういうタイトルにしました。

大学で中国語を勉強するぞというときに、これほどその時々々の環境、具体的に言いますと、国と国との関係から影響を受ける言語というのは少ないんじゃないかなと思います。というのは、私が大学に入ったときの状況がそんな感じでした。私は大学に入ってから中国語の勉強を始めたんですけども、ちょうど、いわゆる天安門事件というのが2年前に起こってまして、当時の世の中の対中国イメージというのは最悪でした。私は大学では中国文学を専攻したんですけども、同級生は一人。その当時あった夜間の学生を合わせても三人ということで、マージャンができないという危機的状況にあったわけです。そういう状況は、しかし、不思議なものでは実はないんですね。というのは、日本と中国というのはすぐお隣です。ですから、いいこともすぐ伝わりますが、悪いこともすぐ伝わる、そういう関係です。さらに言えば、日本と中国、それぞれが非常に大きな力を持っている国同士ですから、その国同士がこんな近い距離の中でせめぎ合っているということは、必

ず摩擦が起きる、起きないはずがないと。近いからこそ、関係が深いからこそお互いの欠点も見えるし、問題も起きる。そのことをあらかじめ踏まえた上で、いかにより良く付き合っていくのが大事なかなと思うんですけれども。ちょっと話がズレてきましたけれども、そういうふうに考えています。

その最悪の時期に大学へ入ったんですけれども、その後、1990年代、中国が経済的に発展しまして、そうなりますと学生の数も急増しまして、あとで聞いた話なんですけれども、私が所属していた中国文学専攻はもう30人とか40人とかになったと聞きました。経済発展の指標として、オリンピック開催というのがありますけれども、ちょうど、2008年北京オリンピックを一つのゴールとして、それを目指して、日中間の経済関係というのは一気に深まって、人・物の交流が増えると。増えると、当然、それを語学で選ぶという学生も増えると、そういう仕組みになっています。私が中国語を教え始めたのは2000年代の半ばなんですけれども、この時期、経済関係も深まりますと同時に、摩擦も急激に増えていきました。

私が中京大学に来る前に、2005年の春にこういうことがありました。そのとき、私は別の大学で中国語を教えていたんですけれども、授業が終わって講師室で休んでいますと、同僚の中国人の先生が帰ってきて、「今日、こんなことありました」と言ってくれたんです。それはどういうことかという、今日は授業で自己紹介をしましたと。最初なんで、それぞれの学生の中国語の発音、名前の読み方ですね、これを中国語の発音で読むとどうなるかということをやって、出席も中国語の発音で出席を取ったそうです。そしたら、授業が終わった後に、一人学生がやってきてこう言ったそうです。「先生、私、名前は……」、仮に佐藤さんとしましょう。「私、名前は佐藤といいます。ズオトンじゃないです。授業は授業として受けますけども、私の名前は佐藤って呼んでください」、結構強い調子で言われたんですね。その先生は、怒るというより困惑するという感じで複雑な表情をしていました。この2005年春というのは、実は、4月に中国で大規模な反日デモが起こっていて、これはあくまで私の想像なんですけれども、その学生は日々ニュース映像を見て、怒りというか屈辱感みたいなものを感じていて、その持っていきどころがないので先生にそういう言い方をしたのかなと想像するんですけれども、その先生からしたら迷惑な話ですし、私から見てもちょっと恥ずかしい振る舞いだなと思いますけれども、そして例外中の例外なんですけれども、そういうことがあったりしました。

一方で、そのとき、純粹に現象として見た場合に、なんで中国語音で名前を呼ばれることが嫌なのかなとちょっと思いました。というのは、今でこそ、例えば、新聞によっては中国語の原音を大事にすべきだという考え方から、例えば、習近平さんのルビにシージンピンと打ったりする新聞もあります。でも、同時に、大多数の人は中国語の発音を日本語の音読みですることが普通だと思います。そして、そのことに特に違和感を持たないと思うんです。というのは、日本語と中国語は漢字という共通なベースを持っているという、そういう背景をみんなが認めているからなんです。だから、もし、その学生の主張に従

うならば、中国の地名とか人名というものを全部現地音で読まなければならなくなる。ということは、その学生の持っている豊富な知識というのが全く無駄になってしまうわけですね。三国志に劉備玄德という人がいますけれども、「リウベイシュエンドー」と読まなきゃいけないと言われるとちょっとつらいものがあります。「唐代の詩人、李白なんていませんよ、リーバイならいますけど」と言われたらむっとしますね。「故人 西のかた黄鶴楼を辞し 煙花三月 揚州に下る」というのは詩じゃないです。「ゲーレン シーツー ホアンホーロウ イエンホワ サンユエ シアヤンジョウ」、こう言ってこそ詩だと言われると、日本の漢詩文化に対しては非常に申し訳ないことになってしまうと、逆から言えばそういうことなんですね。これは極端な例ですけれども、一見、「愛国」的な思い込みが非常な無駄を生み出してしまうということがあります。

私、以前にあるエッセーを読んだことがあるんですけども、そのエッセーの著者が、自分の教えていた中国人の学生からこう言われたというのを書いていました。「先生、面白いカルチャーって、おもちゃって言うんですね」と。そのエッセーの書き手は、発言を聞いて「ばかにされたような気がした」と書いているんです。これはそうなのかな？と思うんですね。自分の文化が軽んじられていると感じたんでしょう、その書き手は。でも、実は、これは元がありまして、1980年代に、ナムコというゲームの会社がありますけれども、それがテレビのコマーシャルで、「重いカルチャーをオモチャーという」というのを流していたんですね。その当時を覚えている方はおられるかもしれませんが、結構はやっていまして、その留学生の発言はそれを下敷きにしてはいるはずなんです。だから、これは、ばかにされていると感じる前に、むしろ、よく勉強しているなど、日本語をよく知っているなどということを感じるべきなんじゃないかなと思っています。こんな感じで、中国とか中国語に対しては、なぜか必要以上に身構えてしまうということがしばしばあるようにちょっと思っています。

思い込みが全て悪いとは思いません。例えば、私たちは箸は横に置くものだと思っていますけれども、中国へ行ったら縦に置いてあるとか、「ウオ ヨウ アイレン」(私、愛人がいます)と言うとギョッとしますけれども、その「愛人」とは奥さんのことで心配は要らないですね。「走」という漢字がありますけれども、これは中国語では歩くという意味でややこしい。こういうちょっとした思い込みが裏切られていくというのは楽しいことなので、それは語学を学ぶ楽しさにつながっていくものだとは思っています。けれども、思い込みが深すぎると、実際、中国と日本で文化的な共通点があまりに多いので、いろんなところで足元をすくわれて、それで身動きが取れなくなってしまうということはありません。

思い込みという点では、私自身も実は経験が最近ありまして、2012年の秋ですね、このときは尖閣国有化ということが行われまして、恐らく、これまでで最大規模の反日デモが中国で行われました。そのときも、例年どおり、国際教養学部の学生を引率して9月に連れて行って、向こうに行っている間も、例えば、地下鉄に乗ったりしますと、地下鉄のモニターに、日本が釣魚島を国有化したというのがしょっちゅうニュースで流れているわけ

です。引率期間が終わって、私は日本に帰りましたが、その後、連日デモ報道があり、さすがにちょっと心配になってきてまして、それで、分かる範囲で中国にメールを送っていました。○月○日にこれこれこういうデモが行われる予定だということをメールで学生に送っていたんです。ところが、学生からしたら、「何の話？」とキョトンとしていました。学校の中は平静、友達もたくさんできているということなんです。これも私の思い込みの一つだったかもしれません。「何も起きていません」という話題はそもそもニュースにならないわけで、そのとき私は日本にいて、テレビ画面の中国が大変なことになってきたから、大学のキャンパスにも影響が及び始めたように錯覚したんですね。

もう一つのテーマ、「こだわり」の方についてもちょっと述べておきたいと思います。先ほど、「愛国」的學生(?)の妙な思い込みについてお話ししましたが、実は、私は中京大学に来てから今年9年目ですけれども、そういうタイプの学生に会うことがほとんどありません。特に、国際教養学部の学生というのは、そういう思い込みから自由な人が多いのかもしれませんが、あるいは、普段から世界のいろんな出来事とか、多様な価値観について冷静に見ている人が多いからかもしれませんが、そういうケースが少ないんです。ただ、あんまりそのことを褒めてばかりいても教育的ではありませんから、私から、ちょっと国際教養の学生は物足りないと思うところを述べておきたい。それは何かというと、ちょっと「こだわり」というのが足りないかなというところなんです。教養という場合に、見る範囲が広すぎてとても一点に集中するこだわりを持つ余裕がないと、手が回らないというのはあるかもしれません。でも、例えば、中国へ留学したときに、初めて中国で日本語を学んでいる学生と会います。会ったときに、初対面ですけれどもお互い学生同士ですからすぐに打ち解けます。ここは、国際教養の学生のすごくいいところで、すぐ友達になれ、屈託なく付き合える。本当にいいなと思っているんですけども、その続きで、中国の学生が日本のいろんなコンテンツ、映画とかアニメとか漫画とか、ドラマとかに対して、具体的に名前を挙げて、これこれこういう点で面白い、そして、そのことは自分の語学の勉強にすごくつながっているんだと言って、その上で、「ところで、皆さん、なんで中国語をやっているんですか」と質問してくる。そのときに、日本の学生側の答えが、抽象的とかぼんやりとしているとか、「なんか就職に役立つから」とか、「中国は経済が発展しているから」というような答えになってしまい、一瞬、微妙な空気が流れてしまうということがよくあります。

要するに言いたいことは、「思い込み」というのは人の行動範囲を狭めてしまいますけれども、「こだわり」というのは決してそんなことはないです。ですから、学んでいる言語に関する具体的な一点突破的なこだわりを、意識して持つようにしていったらどうかというのが私からの提言のようなものです。それは言語を学ぶ上でもプラスになりますし、教養が畑のようなものであるとするなら、そこに1本井戸を掘るような意味合いを持ってくるんじゃないかなと思います。

司会：

ありがとうございます。いろいろと楽しいお話をもう少し伺いたいというのはあるんですけども、時間が限られておりますので。次はアルファロ先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

アルファロ：

ありがとうございます。皆さんこんばんは、国際教養学部 of フランシスコ・アルファロと申します。スペイン語の担当です。今日なんですが、選択言語方法、スペイン語の観点から話をしたいと思います。

まずは、国際教養学部のことについてちょっとお話ししたいです。背景としては、国際教養学部は第二外国語としては五つあります。みんなご存じのとおり、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、フランス語と中国語ですね。毎年、選択言語ガイダンスがあって、全ての入学する学生は第二言語を選ばなければならないんです。英語は基本的に学んで、プラス、第二外国語になります。これは教務課からいただいたデータですけども、この国際教養学部が設立されてからの情報です。ご覧のとおり、2008年から2016年までの情報ですが、赤い数字は全体的な数字です。スペイン語はいつも選択する学生は多いです。2008年から2016年まで青いところを見ていただくと、35、59、44、37、2015年だけ28人スペイン語を選びました。それ以外はいつも50人、今年も、2016年も131人の学生の中、53人はスペイン語を選びました。フランシスコ・バレラ先生とちょっと話して、どうしていつもスペイン語の生徒が多いのか、なんでスペイン語が人気なのか、ということになりました。ほかの言語に対してどう思っているかはよく分かりませんが、あまりよくない印象もあると思います。個人的な意見なんですけれども。

この数字を見て、なぜスペイン語が多いのか疑問ができました。例えば、いつこの言語を学ぶ選択をするのか、理由は何でしょうか。私たちが話しても分からないので、じゃあ、直接学生に聞いてみましょうということで、今年はアンケート調査をしました。2016年に1年生だけ53人にアンケートをして、50人だけ回答しました。ウェブアンケートで直接生徒たちに聞きました。そして、その結果はこうなりました。

質問です。「スペイン語を選ぶことに決めた時期はいつでしたか」。答えとしてはいろいろあり、「希望校を選ぶ以前」、「学校を選んだとき」、「オープンキャンパスで選んだ」、「入試のとき」、「合格から入学まで」、「選択言語ガイダンスで」など、ご覧の結果になりました。この結果を見ると、学校を選ぶ以前にスペイン語を勉強しようと思った学生がとても多かったんです、26% (*30%)。あとは、30% (*26%) が、選択言語ガイダンスで決めました。15人 (*13人) ですね。そして、17人は、合格から入学までに考えてそういう結果になりました。まとめるとこうなります。スペイン語の生徒はいつスペイン語を選択すると決めるのか。大体、この大学に入る前に72%もスペイン語を勉強したいなと決めています。結構多いです。50人の中の36人はそう思っています。他に、選択言語ガイダンスで、全

での言語の代表担当者がプレゼンテーションをして、その場で学生も選択することができます。その場で、13人、26%だけスペイン語を、きっかけとか内容とか、スペイン語はどんな言語とか説明を聞いてから学ぶと決めています。

次、理由は。「どうしてスペイン語を選びましたか」。これも、48%、24人は、「スペイン語やスペイン語が使われている文化・社会に関心があったから」です。これはすごく多いです。あとは、「スペイン語が使われている地域に滞在したり、また、その地域に知り合いがいる」など、いろんな形でつながっているというものです。そして、最後が、「国際社会で必要性が高い」とか、「就職活動のときに使いたい」とか、そういう理由になります。まとめると86%、40人くらいは、スペイン語がいろんな地域で使われているから就職活動とか、必要性があるとか、の理由で選びましたということになります。

次は、もし、スペイン語を選べない場合はどれにしますかと聞いたら、一番多いのは32%で、ドイツ語です。次はフランス語と中国語です。この三つは多いんですが、これはどういう意味か。まとめて見ると、ドイツ語はちょっと多く、フランス語と中国語は同じレベルになりますが、ロシア語は4%になって、他にスペイン語を学べない場合は国際教養学部に入學しなかったという生徒もいました。もうスペイン語だけ勉強したいという意味です。

ですが、先ほど、文化と社会に関心があると言っていた学生たちはどうしてドイツ語を選ぶのでしょうか。スペイン語の文化とドイツ語の文化はとても違うんですが、もし、文化と社会に関心があれば、一番近いのはフランス語です。姉妹言語としたらポルトガル語とかイタリア語、フランス語とか、この大学ではポルトガル語とイタリア語がないから、みんなスペイン語ができなければ、じゃあ、フランス語に行こうというのが私たちから見たイメージです。ですが、そうではなくドイツ語を勉強する。それはちょっと矛盾じゃないですか。ちょっと理解できないです。これは、ちょっと課題になるかもしれないです。答えを見つけるために研究する。研究してからもまた問いを立てられるとかね。最初の質問とこの学生の答えを見たら、これは少し理解できない。

目標の話です。スペイン語を選んで、言語学習の目標はどれですかと聞いたら、学生たちは、この学部は「選択言語と英語の二つをしっかりと学ぶ」。もちろんこの学部は基本的には英語、プラス、第二外国語をとる学部ですので、これは当たり前のことですね。40人(*43人)はそういうふうに答えています。そして、次は、「英語をしっかりと学ぶ」という学生が5人いました(10%)。第二外国語より英語のほうが勉強したい、努力したいという意味です。そして、「選択言語をしっかりと学ぶ」は50人の中に2人だけです。この点についてはある程度分かります。理由があります。なぜかという、この学部はスペイン語学科ではないんです。ですので、スペイン語だけしっかりと学ぶといってもちょっと難しいです。できないです。それに、全ての言語は同じになると思いますが、1年生と2年生だけ必修科目です。そして、3年生、4年生になったら選択科目になります。ですので、スペイン語ばかり中心にしたいと思っても、2年生、3年生になったらもう選択科目になるので、やはりちょっと難しいですね。

僕が言いたいのはここまでなんですけれども、教員としては、頭の中に、どうして、どんな理由、いつ、その問いがあったので、学生に直接聞いてこの答えが出てきました。数年前も同じ形でアンケートがありました。2009年くらいに全ての言語に対してあったんですけれども、今、2016年、もう一回全ての言語に同じアンケートをしたら、スペイン語だけではなくどんな結果になるのか、それも知りたいところでもあります。ご静聴ありがとうございました。

司会：

どうもありがとうございました。自分の科目の受講者がどういうふうに履修しているのか気になったと思いますけれども、大変興味深いご報告ありがとうございました。

(中略)

司会：

アクティブラーニングは、非常に私も気にはしつつもなかなかできないところでもあります。4人の先生方、非常に貴重なご報告をいただきまして、本当にありがとうございました。若干時間が押している関係で、当初は20分ほどの予定だったんですけれども、15分弱という形になりますが、4人の先生方に何かご質問がありましたらご発言いただければと思います。それでは、司会者の特権としてご質問させていただこうと思いますが、先ほど、吉川先生のご発言の中で、「こだわり」というのが必要だということで、学生が学修する際にもこだわりが必要だとおっしゃっておいりました。それは、私も法学、法律学をやっていますけれども、やはり学生なりに「こだわり」のある答えを持ってもらうというのは非常に重要なと思います。先ほども吉川先生からある程度お話はいただけたかもしれませんが、もう少し掘り下げて、4人の先生方に、私はここに一番「こだわり」を持っている、これだけは譲れないというところを、もしはっきりとご教示いただけたところがあれば、もう少し掘り下げてお教えいただければと思います。私も今後の授業等で学生を指導していく上でも参考にさせていただければなと思います。よろしく願いいたします。

吉川：

先ほどの話の中で申し上げました「こだわり」というのは、それほど深いことというよりは、本当に単純に言ったものです。要するに、せっかく一つの言語を新しく勉強しているので、何らかの特定の興味範囲というのを絞ってやったほうが絶対楽しいし、語学的にも伸びるしということです。専門性という言葉でいきますと、やはり国際教養学部というのはできるだけ幅広くいろんなことに目が届くというところを特色としているので、専門性を深めるというのは難しい面もあると思うんですね。だけれども、その中でも、あえて専門と言わず、「こだわり」というのは、やはり何らか好きなものを見つけるということ

ろで申し上げたんです。

私のというと、例えば、私は中国語を教えていますけれども、私にとって中国語というのは、やればやるほど謎が深まるばかりで、分からないこともいっぱいありますし、勉強も終わりがありません。最近で言いますと、『水滸伝』という古典小説がありますが、私はそれにすごくハマっています。日本でも講談師って、物語を話す仕事の人がありますが、その中国版、中国の講談師がやっている『水滸伝』がすごく好きなんです。一日中、時間があれば聴いています。それは、全 328 回あるんですけども、一応、聴き終わると一からもう一回聴きます。ハマっていると理屈じゃないんです、これはもう。それを聴いていると、絶対教科書にないような表現とか、あるいは、その人が勝手に元の話を変えて入れたエピソードをどんどん盛り込んだりしていて、本当に面白いです。

だから、そういうのをどんなことでもいいから見つけてほしいなというのが、すごく単純ですけどもあります。さっき言いましたが、国際教養の学生は、あまり言語周辺のこだわりがちょっとないのかなというふうに感じてはいるんですけども、実際、卒業した後中国の楽器にすごく興味を持って、演奏できるまでになった人もいますし、いつそのこだわりを見つけるかというのは人それぞれ時間差があるとは思いますが。せっかくですから早いうちに見つけたほうがいいのかと思っています。すみません、答えになっているかどうか分かりません。

司会：

ありがとうございます。今のお答えからすると、興味を植え付けられるような授業をというふうにも受け取れます。私自身も学生に興味を、「こだわり」が見いだせるような授業をやっていければなと思っています。ほかの先生方もよろしければお願いします。

平郡：

とても難しい問題で、これは僕がずっとテーマにしていることなんですが、「こだわり」というのは自分のアイデンティティー、自分らしさ、そこと繋がりがあるんじゃないか、と考えています。普通であればルールで説明するところを、誰もが見つけられないルールを見つけるんだという気持ちで僕はいつも本を読んでいます。昔は、『このことに関しては他のやつには負けんぞ』という生徒がかなりいたと思うんですね。それが、最近、そういう「こだわり」を持っている生徒が少なくなったなあというのが最近の中京大学の学生に対する僕の印象です。「学生よ、もっと自分らしさを持ってくれ」と僕は言いたいと思います。

アルファロ：

僕は、吉川先生のお話を聞いて、言われてみれば、学生時代のときから、初めて日本に来たときに日本語を勉強している間に、最初はもちろん、読み方、書き方とか、漢字、会話、

作文とかいろいろありました。留学生として日本に来て、3年間くらい決められて、3年間経ち、修士課程を卒業したら帰国しないとイケない。そうすると、3年の間に1年間日本語を勉強するのですが、何のために日本語を勉強しないとイケないのだと考えました。僕は、本当は漢字の書き方などは、テストのために勉強していたんです。3年間が終わったら、グアテマラ出身ですのでグアテマラに帰ったら誰に漢字で手紙を書くんですかと考えた時に、漢字の書き方は覚える必要はありませんと思いました。

僕は、こだわりとしては会話に力を入れて、せっかく日本にいるから、3年間ぐらいここにいるから、人が言っていることは理解したい。僕が言っていることは人たちに理解してほしい。それで、それがきっかけになって「こだわり」になり、会話に力を入れて、書くことはちょっと置いておいて、読むことは大事にしました。歩くときに何が書かれているのか、どこにいるのか、それが分からなかったらよくないと思ってそうしました。でも、書き方はあまり要らないと思いました。今、後悔していますけどね。そのときに将来日本に住むつもりではなかったんですけども、ここでずっと働くつもりじゃなかったんですが、今は書くことを大事にしなかったことを後悔しています。会話でコミュニケーションを取りたい、理解してほしい、理解したい、それは、たぶん、僕のその時代の「こだわり」だったと思います。

(中略)

司会：

どうもありがとうございます。ちょうどお時間もそろそろというところなんですけど、いかがでしょうか、よろしいでしょうか。それでは、今日は4名の先生方に貴重なご報告をいただきまして、誠にありがとうございました。また、こういう機会につきましては、来年度もこの学部の教育事業推進委員会の中で議論をさせていただき、今後の課題などを見つけれればと考えております。教員の皆さまにおかれましては、今後ともご指導いただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。ここで教育事業推進委員会主催の、経験交流会を終了させていただきたいと思います。どうもありがとうございました。